

# 干潟及び藻場回復の取組に関する支援

## I 天皇家におけるアサリ生息状況調査

増養殖環境課 池部 慶太

### 1 背景・目的

近年、全国的にアサリの漁獲量が減少しているなか、高知県でも1983年度の2,819トンを最大値としてその漁獲量は減少を続け、現在ではアサリ漁業が成立しなくなっている。高知県水産試験場は、かつてアサリの主産地であった浦ノ内湾の湾口部に位置する天皇家に調査定点を設け、2004年度からモニタリング調査を実施してきた。

本報告では、2021年4月～2022年3月まで行った調査の結果と、2015～2021年度の生息密度の推移について報告する。

### 2 材料と方法

調査定点、地盤高、調査期間、調査回数及び調査日を表1に、調査定点の位置を図1に示す。

表1 調査定点一覧

調査定点	地盤高(cm)	調査期間	調査回数	調査日
北	0	2021年4月～ 2022年3月	12	2021年 4月12日,5月13日,6月11日,7月8日, 8月11日,9月8日,10月18日, 11月18日,12月20日 2022年 1月17日,2月17日,3月17日
南	0	〃	12	
対照	+50	〃	12	

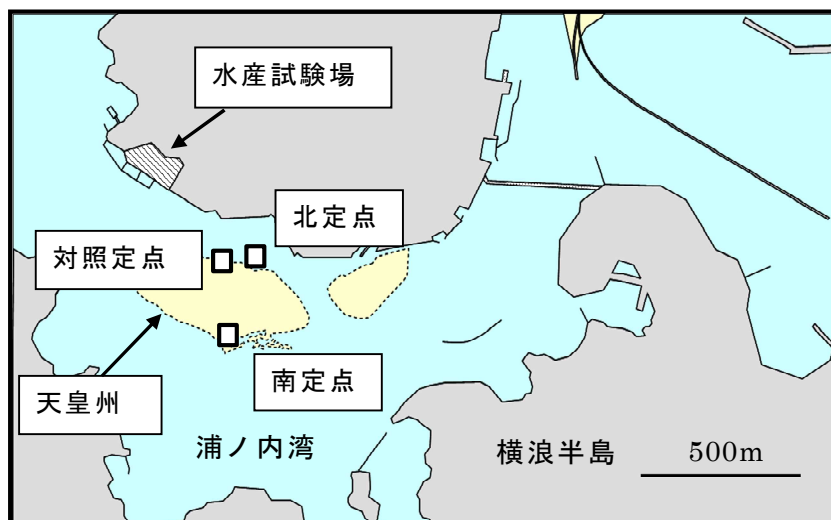


図1 調査定点の位置

北定点と南定点は、地盤高0cmの調査定点であり、2004年7月から調査を行なっている。対照定点は、地盤高+50cmの調査定点であり、2010年6月から調査を行っている。これらの定点で毎月1回、アサリ生息状況調査を行った。

サンプリングは、ポリ塩化ビニール製コアサンプラー（サンプリング部分 内径108mm・深さ100mm）を用いて行った。1定点につき5回ずつ、深さ10cmまで採取した底質を1サンプルとし、2mmのふるいで砂泥等を除去した後、アサリの生息個体数を計数するとともに殻長と総湿重量を測定した。

### 3 結果と考察

アサリの生息密度、重量及び平均殻長の月別平均値の推移を図2に示す。北定点と対照定点の生息密度は、5月から減少し始め6月にはほぼ消滅し、12月から再び増加した。南定点は概して少なかった。最大値はいずれも3月にみられ、北定点で8,736個/m<sup>2</sup>、南定点で939個/m<sup>2</sup>、対照定点で13,497個/m<sup>2</sup>であった。生息重量は、生息密度と同様の変動傾向を示した。最大値は北定点で293.5g/m<sup>2</sup>（3月）、南定点で45.2g/m<sup>2</sup>（3月）、対照定点で448.1g/m<sup>2</sup>（4月）であった。稚貝の平均殻長は、年間を通して多くが4~6mmであった。なお、南定点の5月はフロートが消失し、定点を見失ったためにサンプリングできず、欠測になった。

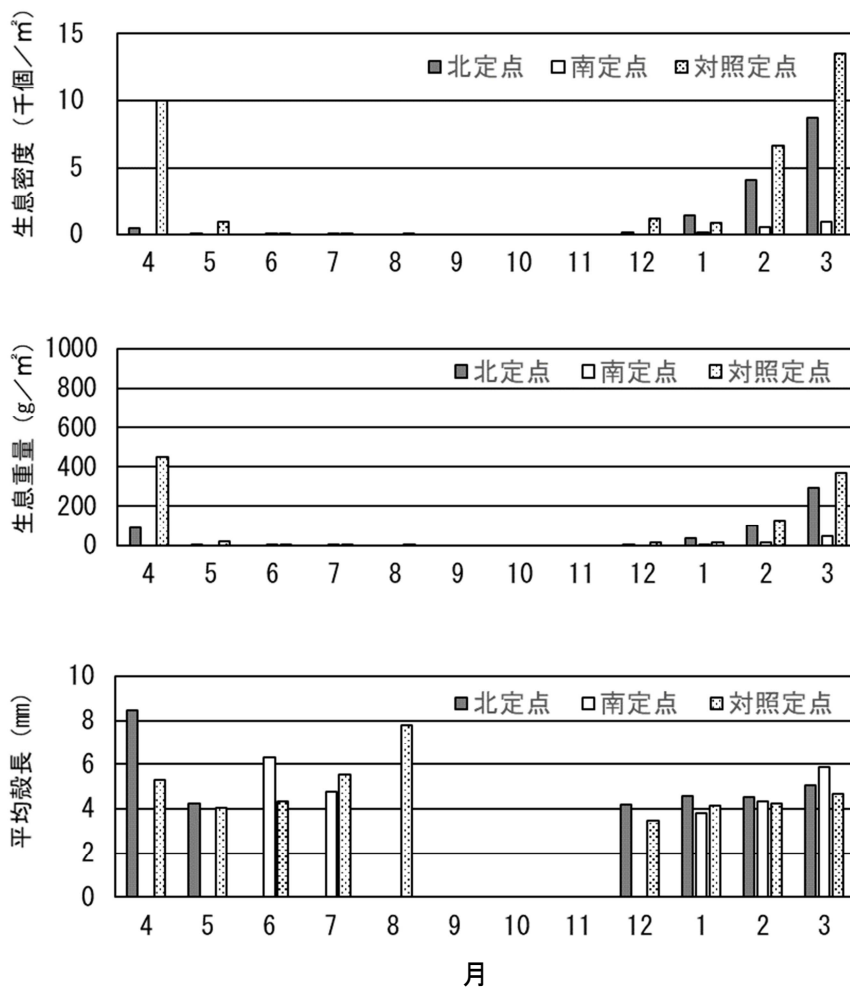


図2 天皇家の定点におけるアサリ生息状況調査結果（5月の南定点は欠測）

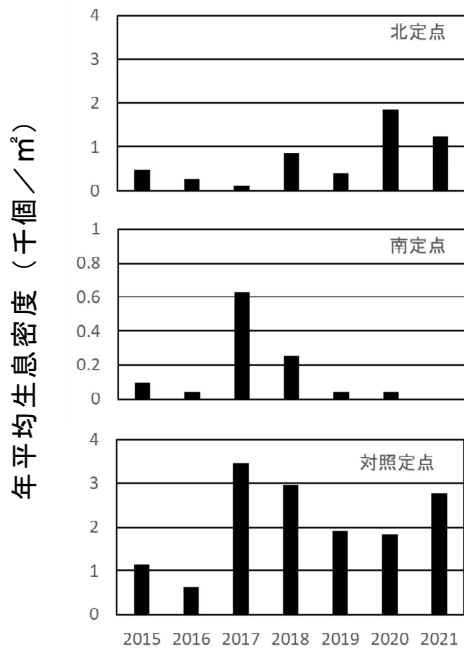


図3 定点ごとの年平均生息密度

2015～2021年度までの北、対照定点の年平均生息密度を図3に示す。2021年度の南定点の平均値は、5月に欠測があるため2015～2020年度までの数値を示した。最も密度が高い傾向があるのは対照定点で、次に北定点、最も低い傾向があるのは南定点であった。

対照定点の2017、2018年の密度は3千個/㎡前後となり、2019、2020年と約2千個/㎡未満に減少したが、2021年には再び2.8千個/㎡程度に増加した。北定点は2019年に増加し、2020年、2021年は千個/㎡以上の密度となった。南定点は約0.6千個/㎡以下の小数であったが、増減傾向は対照定点と若干似ていた。

2015～2021年度までの月別生息密度の推移を図4に示す。個体数が増加する時期は1～4月であり、個体数が減少する時期は概ね5～6月であった。

2021年度における稚貝の生息密度は、2017～2020年度と同様に春期に増加した後、初夏から急激に減少した。減少の原因は、これまでの調査結果(児玉・田井野 2016、児玉・林 2017、山下ら 2018)から魚類等の食害による影響と考えられる。

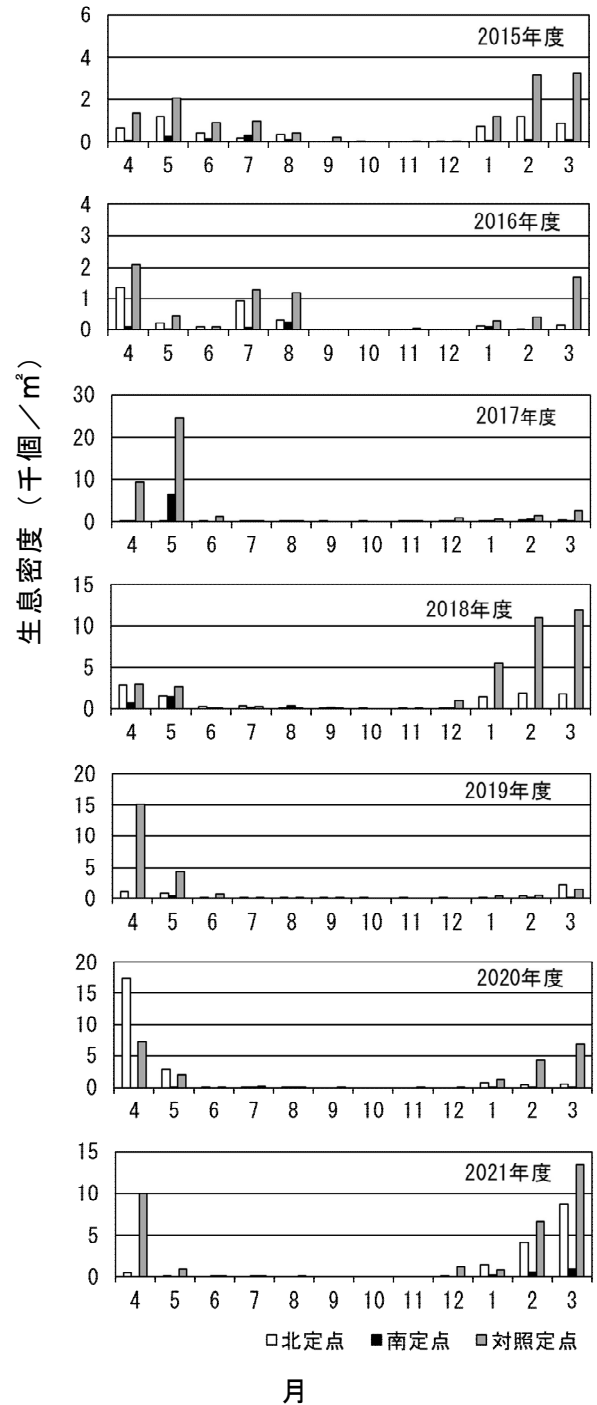


図4 2015～2021年度の生息密度の推移

## 5 参考文献

- 児玉修・田井野清也（2016）アサリ資源回復試験．平成 26 年度高知県水産試験場事業報告書，112，120-136.
- 児玉修・林芳弘（2017）アサリ資源回復試験．平成 27 年度高知県水産試験場事業報告書 113，169-191.
- 山下樹徹・林芳弘・児玉修（2018）アサリ資源回復試験．平成 28 年度高知県水産試験場事業報告書 114，100-114.